

## アンチプラスチンに関する二、三の試験について

望月正巳・田口 吟

(富山県農業試験場)

富山県に於て行われたアンチプラスチンの応用結果について若干の試験例を報告したい。まず、3000万単位と1000万単位をそれぞれ4回施用した試験であるが、これは畦で区切られた3坪の区内に2坪の木ワク(地下4寸、地上6寸)区切りを造り各々1個の水口をあげ出口は設けず木ワク内にだけ本剤を供試した。黒部1号(早生種)を5月8日播(晩播)して7月1日に移植(晩植)し、本田にはN肥だけ5割増のほかは標準肥を施し、7月7日、17日、28日、8月10日の4回アンチプラスチンを施用した。区は3連制であるがその平均値を示すと第1表の通りである。

即ち、草丈、莖数、出穂期、出穂揃等では見るべき差はなく、全般的に生育差は見られない。また罹病程度

に於ても一定の傾向をみることはできそうもない。ついで、県下各地で行われた結果を概観すると、平坦地でクビイモチ病だけを対象として穂ばらみ期及び出穂直前に800万単位を2回施用したものでは生育及び罹病度に差は認められなかった。また、中間常発地帯を対象とし穂ばらみ期と出穂直前に600万単位を2回施用したものではクビイモチ病の罹病程度には差がみとめられないが枝梗イモチでは処理区の方がかえつて多発気味でさえあつた。また、同地帯でアンチプラスチン600万単位2回施用とセレスン石灰反3kg2回撒布との比較試験を行つた結果ではクビイモチ、枝梗イモチとも無処理区が最も多く、アンチプラスチン、セレスン石灰の順に発病が低下していた。

第1表 生育並びにイモチ罹病程度

試験区	8月10日調査		出穂期	穂揃期	8月23日調査			8月18日	8月28日調査		
	草丈	莖数			草丈	穂長	穂数	ハイモチ率	穂数	クビイモチ率	枝梗イモチ率
3000万単位区	74.0	24.2	8月15日	8月16日	100.6	20.3	20.1	0.1	201	0.83	0.72
1000万単位区	78.7	25.1	14	15	105.2	21.8	20.4	0.1	204	0.50	1.80
無処理区	78.4	24.6	14	16	101.0	21.8	18.9	0.1	201	0.50	0.73

## クビイモチの集団防除について

小野小三郎

(農林省北陸農業試験場)

ハイモチの場合には小面積の葉剤撒布でも、その時期が適当しておれば、充分その効果をあげることが出来る。しかし、クビイモチは発生の機構からして大面積の、しかも同時的撒布でなければ効果があがらないことが考えられる。このような集団防除の効果を實地に試験したので、その成績を記すことにする。この試験は富山県及石川県下7ヶ所で行つたものであるが、大体次のようにとりまとめられようかと思う。

### 例1. 金沢市木越町の場合

ここは農林1号及農林21号が主となつていところ

で、出穂期は8月5~8日である。約10町歩のはぼ正方形の水田を供試、7月23日にセレスン石灰を、反当3Kg、共立式動力撒粉機6台、人員19人、2時間半で撒布した。8月26日に、ランダムに選んだ田から50株をとり調査した結果は第1表の如くであつた。

これによると、個人的な撒布よりは集団防除を行つた方がかなり高い効果をあげている。

### 例2. 富山県福光町の場合

ここは山林にかこまれた谷間の水田で、イモチの常発地帯である。品種は殆んどが無芒愛国、面積は約2